

機動戦士ガンダムSEED～蒼い死神と絶剣と呼ばれた少年少女

更識蒼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺達はあの世界に負けて死んだ

それぞれの未練を残して死んだ

そして運命は新たな生をもたらし別の世界に産み落とした

それは何を意味しているのだろうか……誰もわからない

《機動戦士ガンダムSEED》蒼い死神と絶剣と呼ばれた少年少女の始まりです

これは絶賛投稿中《ソードアート・オンライン》蒼い死神と絶剣《IFのお話

目次

プロローグ	1
漆黒のアフレクト	6
悩みを持つものと新たな剣	9
宙へ	13
宙へⅡ	21
揃う同盟	25
動き出す戦場	29
L4戦線	32
目覚め	35

プロローグ

コズミック・イラ70、血のバレンタインの悲劇から、地球、プランの間の衝突は一気に武力闘争にまで発展した。そして、だれもが疑わなかった数で勝る地球軍の勝利、だか……。当初の期待をおおきく裏切り、お互いに疲弊したまま、開戦から11ヶ月が過ぎようとしていた。

オーブ連合首長国

海に囲まれるオーブ連合首長国の広い砂浜……。夕日が綺麗な砂浜の一件のログハウスのテラスに一人の少年が木の椅子に座っていた。

「ッソー」、そろそろ夜だから室内に入ってよ」

ソーと呼ばれた少年の後ろの窓から顔を出して少女が言ってくる。

「ああ、わかったよ ヲウキ」

ソーと呼ばれた少年は椅子から立ち上がり海に背を向けてログハウスのドアの方に歩いていく……。だが、一度止まって海の方を向いて
呟く

「戦いが始まろうとしているか……。今度の戦場はここオーブ
……………」

少年はまた、歩き出しログハウスの中に入っていく。

少年の言葉は数日後……。現実となった。

数日後 オーブ連合首長国

中立を誇るオーブ連合首長国は今まさに地球連合の侵略を受けていた

「ソール早く逃げないよー！」

「わかってるよ、地下シエルターに移動しよう。」

避難勧告が出されていたが、俺とユウキはこの家の物を片づけるのに手間取ってしまい、戦闘が始まってからかなりたってようやく避難できる。

そして、俺とユウキは荷物を持って地下シエルター用のエレベーターに乗り込む。そこまではVIP用みたいなお偉い者の住む、家なのだが……この家には秘密があり、家の地下には

人型ロボット……モビルスーツが四機置いてあるのだ。

「ここなら安心だろう……」

俺は眩くが上では爆発音や地震が絶えない

そんななか、俺は一番端のMSに目を向ける。

「どうしたのソール？」

MSを見ているとユウキが心配そうに聞いてきた。

「ああ………『前世』のことを思い出していたんだ………ずっと戦ってきた『前世』の記憶を……」

俺は……いや、俺達は元々、この世界の住人じゃない……前世の世界はバーチャルシステム……ネットワークに意識を送り込むフルダイブ環境が確立した世界だった……だけど、俺は……俺達はフルダイブ型の初のRPGゲームで死んだ。

そのゲームは初回ロッド一万限定で発売され当初は大きな話題となった……だが、そのゲームの正式サービス開始の日……一万人のプレイヤーを閉じ込め、さらにはHPが0になれば現実で脳が焼き切られると言うデスゲームになっていた。

デスゲームを突きつけられた一万のプレイヤーほとんどが負の感情に……恐怖や怒り……絶望などの感情に飲み込まれていた。

それでも現実には帰ろうと立ち上がる者達が少なからず攻略組としてゲームクリアを目指して百層からなるあの城を登っていた……

だが、ある時……俺とユウキは三人の仲間と74層に迷宮区の攻略をしていると連携もとれないバカ共が74層のフロアボスに挑み、俺達五人は助けるためにボス部屋に入り込んだ……だが、それがいけなかった……助けに入って俺とユウキは死んでしまった……そして、次に目を覚ますとこの世界に転成していたのだ

「ソーはなにがしたいの?」

「え?」

俺はユウキの言葉の意味がわからず黙ってしまふ。

「ソーは……うん、《更識蒼》はなにがしたいの?この世界で……なにがしたいの?」

ユウキのガーネットの赤い眼が俺を見ていた……

「俺は……ユウキ……《紺野木綿季》とずっと、幸せに……平和に暮らしたい。」

俺はなぜかわからないが涙を流していた。そんな俺にユウキは抱きついてくる

「ボクも《更識蒼》とずっと、幸せに……平和に暮らしよ……でも……上では……ボクたちの国は争い……戦争をしている……こんな平和じゃないよね……だからさ……ボクはこの《意味のない戦い》を……戦争を止めたい……そのためなら戦えるよ……戦わなくちやならない……」

「……ユウキは人殺しになるんだよ?……ユウキは……ムギユ」

俺は最後まで言う前にユウキの口に遮られる

「……正直、怖いよ……ボクがボクで無くなっちゃうかもしれないから……でも、ソーなら……ソーと一緒にボクはできると思う……ソーがボクの支えでボクの光りだから!」

ユウキの覚悟は本気みたいだった……そして、震えていた

俺はユウキは強く抱きしめる

「ユウキの気持ちはわかった……俺の気持ちも……行こうユウキ……ユウキの支えが俺なら……俺の支えはユウキ、君だ……ユウキは俺を……俺はユウキを支えあう……そして、この戦争を終わらしてずっと……永遠に二人で暮らそう！」

「うん！」

俺達は立ち上がりパイロットスーツに着替え（もちろん別々の所で）俺が見ていたMSの複座式コクピットに俺が前でユウキが後ろの席に乗り込み、OSを立ち上げる。

「……OSは無事に立ち上がった……機体もどこも異常なし。そっちは？」

俺は各種確認するとキーボードを後ろで叩くユウキに聞く。

「こつちも問題ないよ。全システムオールグリーン……いつでも行けるよ」

ユウキの報告を聞いて頷くと通信が開き二人の少年の顔を映し出される。

『固定アームは解除しました。』

『俺たちも直ぐにでるからな！』

「ああ、ありがとう」

俺が返事すると通信が切れる……先ほどの二人は死ぬぎりぎりのところを助けて地下で療養させていた二人で一人はザフトのMSパイロットでもう一人は地球軍の船に乗っていた民間人……分け合って戦闘機に乗ったが撃墜された所を俺達が助けたのだ。

「じゃあ、行こうユウキ！」

「うん！」

俺達はお互いに少しだけ見つめ合う。

「『更識蒼』『紺野木綿季』！アフレクト、行きますす!!!」

俺はバーニアをふかし地上に行きよいよく飛び出した。

「俺（ボク）がこの世界を変える！」

俺達の戦いが始まる

続く

漆黒のアフレクト

ソウ side

「敵機…地球軍MSストライクダガー10機8時から接近！」

「了解！」

アフレクトのコクピットの後部座席からユウキの報告を聞きながらアフレクトのバーニアをふかせ8時方向に向きを変える。すると、地球軍の量産機ダガーが10機むかつてきていた。

「アフレクト…これより地球軍MSを駆逐する！」

俺は右腕に装備してあるソードをマウンドさせダガー10機に向かってバーニアをふかし飛んでいく。

「追加で12時から向かってきてるよ！」

「了解！早く片づける！」

ユウキのサポートを受けながらダガー10機に接近する。すると、ダガー10機はビームライフルを連射してくる。

「あたらねえよ、そんなの！」

俺はビームを巧みに避けダガー1機のコクピットから上下分けるように切り裂き、ダガーは爆散する。

「次！」

今度はソードをマウンドしてライフルモードにし一発一発的確にダガーに当てダガーを破壊していく…それと同時に人の命を奪っていく。

俺はさらにバーニアをふかせ先ほどユウキからの報告にあった増援のストライクダガーをライフルモードとソードモードを切り換えながら撃墜させていく。すると……………

「前方敵新型MS三機とオーブ軍の機体？が戦闘中…どうする、ソウ？」

「二機で抑えられてるなら問題無いな。俺達は残りのストライクダ

ガアの駆逐だ。行くぞユウキ」

「うん！」

話をまとめて再びバーニアをふかせ戦場を駆け抜ける。

そして、その後ろにオーブ軍のM1アストレイに似た白と緑の機体が大型スナイパーライフルを片腕に付けた二機の機体が追いかけてくる。

GN-PO4R アストレイグリーンフレームリバイヴ

この機体は俺とユウキがこちらの世界に目覚めたときからアフレクトともう一機と一緒にあの地下シエルターにアストレイグリーンフレームを改修した機体で装甲は発泡金属装甲からPS装甲に変えてあり遠距離型機体に装備を変更してある。

『僕は別方向から地上で敵MSの撃墜に勤めます。』

二機から通信が来て二機のコクピットに乗った少年達の顔がヘルメットに隠れながらも映し出される

「ああ、まかせた。＼ツール＼、＼ニコル＼」

『おう』

『ええ』

簡易に話を付けると二機との通信が切れて二機共に別々の方向に下降していく。

「それじゃあ、行くぜ！」

俺はバーニアをふかせ飛んでいるダガーをライフルやソードで破壊していく。そして、しばらくすると……………

「敵MS撤退をしていくよ」

「そのようだな…………ユウキお疲れ様」

「ソーもね」

俺達はコクピット内でそんなことをいいながら地面にアフレクトを下ろす、近くにはアストレイグリーンフレームリバイヴ二機が降り立つ。

そして、俺達の機体の周りには武装したオーブ軍が集まってくる

「まあ、仕方ないか…………ユウキはここで待っていてくれ」

「イヤだ。ボクも行くよ」

「はあ……わかった。」

ユウキは一度決めたりするとしても決めたことを曲げないので俺はため息をはくとコクピットを開けてる。

「じゃあ、行くよ」

「うん」

俺はユウキを片腕で抱きながらワイヤーを使って機体から降りると一斉に銃口を向けられる。

「助けてやったって言うのにとんだ挨拶代わりだな」

俺がそう言うとおーブ軍の軍服を着た金髪の少女と水色……というよりは空色に近い色のパイロットスーツを着た少年とザフトの赤いパイロットスーツを着た少年が歩いてきた。

「援護してもらったことには感謝する。だが、お前達は何者だ？そっちの緑のはアストレイに似てるが……」

少女の質問に答える前に俺達はヘルメットをとる

「緑の機体はアストレイグリーンフレームリバイヴ、オーブ軍のM1アストレイの元となったアストレイシリーズのグリーンフレームを改修した機体だ。そして、俺の名はソウ・S・クロスロード。そして、この黒いのがアフレクトだ。」

「ボクはユウキ・K・グレイス。ボク自身の機体は別にあるけどアフレクトのサポートパイロットをしているよ」

二人のこともあるがまあ、いいだろうと言うことで話を進める。

「俺達はソレスタルビーイング。戦争を止めるために活動を始めた。と、言ってもメンバー俺とユウキ……後はリバイヴのパイロット二人の四人だけだな」

まあ、組織名はさつき思いついたのだが……俺とユウキ以外唾然としているから信じてもらえるだろう。

その後、MS4機を目覚めたときからあつた母艦に移してオーブの空いているドッグに入れることとなった。

続く

悩みを持つものと新たな剣



俺達の母艦……プトレマイオス2を家の地下からオーブのドッグに移動させ、リバイヴのパイロットのトール・ケーニツヒとニコル・アマルフィを紹介すると二人の元々の仲間……友が泣いていた。

その後直ぐに俺達四人と紅いMSのパイロット……アスラン・ザラさんの五人は今回の連合のオーブ侵攻のことを聞かされる。

みんな、絶句していた。

オーブの目指してる物は俺も理解できるしそうなってほしい……だが、連合が、このまま何度も攻めてくるのならば、オーブは間違はなく落ちる

「まさか、そんな……」

「うん、大変だつてことはわかってる……けど、仕方ない。僕も……カガリのお父さんの言う通りだと思っから……」

キラさんは、さらに続ける

「オーブが地球軍側につけば、大西洋連邦はその力を利用して、プラントを攻める。そして、それはプラント側についても同じこと。ただ、敵が変わるだけ」

「だが……」

アスランさんが、キラさんを止めようとする

勝ち目のない戦いに、足を踏み入れようとするキラさんを止めようとする

「戦わないですむ世界ならいい……そんな世界に、ずっといられたなら……。けど、戦争は広がるばかりで……」

キラさんは、そこで言葉を切り、俺達五人を見る

「だから、僕は戦うんだ」

キラさんは、立ち上がり去ろうとする

「もう、作業に戻るよ。攻撃、いつ再開されるかわからないから」
「一つだけ聞きたい！」

立ち去ろうとするキラさんを呼び止め、アスランさんも立ち上がる
「フリーダムには、Nジャマーキャンセラーが搭載されている。それ
をお前は…」

「ここであれを何かに利用しようとする人がいるなら、僕が撃つ」

アスランさんの言葉に、即答するキラさん

キラさんは、その言葉を最後に作業に戻っていく

アスランさんは、そんなキラさんを見送ることしかできなかつた。

「……アスランさん」

「君か……」

そんなときに俺が後ろから声をかける。アスランさんは振り向く
「軍人のアスランさんに一つ聞きたいことが在るんですがいいですか
？」

「ああ、答えられる範囲なら答えよう」

アスランさんは了承して俺は軽く深呼吸をする。

「あなたは何のために戦ってるんですか？」

「ツ！」

俺の質問に表情を歪ませるアスランさん……そうしているとユ
ウキが歩いてくる

「アスラン……さん……は……もう答えは出てるんじゃないの……ですか
？」

ユウキのぎこちない敬語で言うとアスランさんは俺達の方をまっ
すぐと観る

「君達はいったい……」

「ただのモビルスーツ乗りですよ」

俺はそう言ってアスランさんに背を向けて歩きだす……その後す
ぐをユウキが歩いてくる

そんな会話をしてからすぐに大西洋連邦の第二次オーブ侵攻が開始される。

次々と残機のM1アストレイが出撃していく

ソレスタルビーイング
「S B も出るぞ！ トールはいつも通りリバイヴで出撃！ ユウキ！
今回は総力戦だ、自分の機体で出撃してくれ」

「うん、わかったよ！」

そう言ってユウキはプトレマイオス2の格納庫の自分の機体に走っていく。

「ニコル、君はアスランさんと話してきてくれ。いまだに迷ってるみたいだからな。そのあとリバイヴで出撃してくれ」

「了解しました」

ニコルは走り去っていった。

「それじゃ、俺も行かないとなー！」

俺はみんなに指示を出してからアフレクトに乗り込む

その横にはユウキの専用MS、アフレクトと真逆の白をベースとした機体……名は

GN-02 ヴイルキス

純白の白をベースにコクピット付近が赤と紫……武器は前世のユウキを思わせる片手剣とユウキの親友だった閃光のアスナを思わせるレイピアを装備していてこちらもアフレクト同様近距離特化型の機体になっている。

プトレマイオス2は発進させられないので俺達はカタパルトを開いてピットの扉を開き出撃する。

「更識蒼、アフレクト行きますー！」

俺が出撃しその後ユウキのヴイルキス、トールのアストレイグリンフレームリバイヴと続く

「ユウキ、俺達はまず被害拡大要因の新型三機を殺るぞ！」

『うん！ わかった！』

『俺はダガーを殺ればいいな!』

「ああ、任せた!」

俺達は二手に分かれて敵を撃墜していく。

『ソ、前方に新型を捉えたよ!キラさんとアスランさんが戦ってるみたい!』

「うん、こちらでも補足したよ。行くよ、ユウキ!」

『うん!』

二手に分かれてダガーを破壊していくとユウキから報告があつてすぐに俺も補足してそいつ等に向かつて飛んでいく

「だあああああ!!!」

俺のアフレクトとユウキのヴィルキスが敵の三機とアスランさん、キラさんの機体の間に割り込む

「アスランさん、キラさん!ここは俺達が殺りますので他の援護を!」

『ソウくん!?!』

『お前!』

『行つてキラさん、アスランさん!』

ユウキが怒鳴るとキラさんとアスランさんは機体をこの場から離れさせる。その間にも俺達には三機からの攻撃が来るが簡単に避けられた

「それじゃあ、殺ろうか!」

「うん!」

俺とユウキは三機に機体を向けて飛ばした。

続く

宙へ

「はあああああああああああ！！！！！！」

俺とユウキは可変式の赤と黒の新型に的を絞って動き出す

「悪いね、先に脱落だよ！」

俺とユウキは同時に剣を振るい、赤黒い機体の両翼、両腕に両足を切り落とした

「ユウキは水色のを！俺が緑のを殺るから！」

『了解だよ！』

一機目を戦闘不能にした俺がそう言うとユウキは通信越しで軽くそう言い、お互い別々の方向（ほとんど同じ所にいるようなものだから関係ないが）にバーニアを蒸かして飛んでいく……

「俺の武器が鎌じゃないのは残念だ」

俺が向かった方には死神の鎌みたいな武器を持った緑の地球軍新型MSがオーブのM1アストレイを次々に破壊していた……先日の戦闘で観た限り、こいつにはビーム兵器は効かない……と、言うよりは曲げられてしまう……面倒なのはこいつが放つビームも曲げられ死ぬうめんどくさい装甲をしている

「でも、やり用はある！」

俺はバーニアを噴かせて急接近して瞬間的に両腕を切り落とすと、反撃してくるがすぐに新型三機が脱退して、それからすぐに地球軍はオーブ海域から姿を消した。

「オーブを離脱？」

オーブ行政府、そこにアークエンジェル艦長マリュー・ラミアスとキラさん、アスランさん、ディアツカさん、ムウさん、カガリ・ユラ・アスハと俺たちが集まっており、マリュー・ラミアスが、ウズミ・ナラ・アスハに聞き返す

ウズミ・ナラ・アスハはマリュー・ラミアスの言葉にうなずく

「そうだ。君たちはオーブを離脱し、宙に上がれ」

「お父様!？」

ウズミ・ナラ・アスハの言葉に、カガリ・ユラ・アスハは反論しようとする

だが、ウズミ・ナラ・アスハはそれを目で制する

「地球軍が撤退していった今がチャンスなのだ。いずれ近いうちに、地球軍は再びオーブを攻めてくるはず」

ウズミ・ナラ・アスハの言う通り、撤退したとはいえ、そう時間が空かないうちに地球軍は攻めてくるはずだ
今度は、もっと多くの戦力を持ってきて

「そうなれば、オーブだけではなく、君たちまで犠牲にしてしまう。それだけは阻止せねばならん！」

「…」

「私たち老いぼれが死ぬだけですむなら喜んでその命を差し出そう。だが、そういうわけにもいくまい」

「……………んな」

俺はウズミ・ナラ・アスハの言葉に苛立っていた。

「「??」」

「ふざけんなー！」

俺はとうとう怒りを爆発させてウズミ・ナラ・アスハの胸ぐらを掴む

「お前ー！」

俺の行動にカガリ・ユラ・アスハが怒りながら俺の方に近づいてくるが俺は無視して続ける

「いい加減にしろよ！オーブの代表としてあんたの考えはわかる……………だがな、親が国のために死んでんだら娘に何が残るんだよ!?俺も言える立場じゃねえが少しは残される者の……………娘のカガリ・ユラ・アスハの事くらい考えろー！」

俺の激にその場のみんなが驚いていた。

プトレマイオスⅡの艦橋で、発進準備が進められていた
プトレマイオスⅡの艦橋には操縦席が二席、管制が二席、サブ席が二席、そして中央に艦長席が一つとザフト、地球、オーブ3軍の戦艦とは異なっていた。

「トール、行けそうか?」

「もちのろん！元はアークエンジェルの操縦桿を握っていたからな、これくらいは問題無いよ」

「わかった。ニコル、ユウキ、そっちは大丈夫か?」

「もちろんですよ。助けられてからこの艦のシステムは教えてもらいましたから」

「ボクも大丈夫だよ！」

「プロレマイオスⅡは着実に準備が完了して行く」

「そろそろ行けそうか？」

「現在、ブースターの最終チェック中です」

「そうか」

「オーブ行政府、連合の脅威が去っている今だからこそ、皆、落ち着いて作業ができていた。」

「お父様！」

「…カガリ」

カガリが、ウズミの胸に飛び込んでくる

「…何をしておる。お前にはお前のすべきことがあるはずだ」

ウズミは、涙をこぼしながら近づいてくるカガリになるべく冷たく返す

カガリは、ウズミの腰に回している腕の力を強くする

ウズミは、ふっと微笑むと、自分の腕を優しくカガリの腰に回す

「大丈夫だ、カガリ。オーブのことは私が引き受ける」

「私が言いたいのは、そんなことじゃ…!」

「カガリたちが戻ってくるまで、死ぬつもりなどない。あの男に活を入れられたからな。この代表という座を、お前に譲り、オーブをどう良くしてくのかをこの目で見るまではしねぬ」

「…!」

涙で溢れているカガリの目が、大きく見開かれる

ウズミは、腕を離し、カガリの腕も優しく解く

「さあ、早く行け。先程も言ったが、お前にはやらねばならないことが他にあるはずだ」

「お父様…:…?」

未だに不安そうな目で見てくるカガリの手のひらに、ウズミは一枚の写真を乗せる

「お前は、一人じゃない」

ウズミは、カガリが気づかない間に、カガリの後ろに来ていたキサカに目くばせする

キサカは頷き、カガリの腕を取り強引にクサナギまで連れていく

「兄弟もおる」

「…！お父様！」

「そなたの父で、幸せだった」

クサナギに乗せられるカガリ

それを見届けた後、ウズミは管制室へ向かっていく

その間にもカガリの泣き叫ぶ声が聞こえてくる

だが、ウズミが振り返ることはなかった

「いいわね？ローエングリン斉射と一緒に、ブースターを全開」

「はいー！」

マリユートの指示に返事を返すクルー

艦橋の空気はそこまで殺伐としたものではない

「ラミアス艦長」

そこに、モニターにウズミの顔が映る

「宇宙に上がったたら、L4コロニーを拠点とするがいい。あそこは、廃棄されているが、未だに機能はしている。拠点とするならばもってこいだ」

「…何から何まで。ありがとうございます」

マリユーは理解する
ウズミは、本気でこれからの行く末を自分たちに賭けているということ

「さあ、いけ。こっちとしても、色々しなくてはならぬことがある」
モニターが切れる

「…」

マリユーは、もう切れてしまったモニターに向けて頭を下げる
感謝の気持ち
そして、決意の気持ちを込めて

「…準備はいい？」

笑顔を浮かべながら頷くクルー
本当に頼もしくなつたと感じる
マリユーも笑顔を浮かべる

「…。アークエンジェル、発進！」

大天使は、宇宙に飛び立っていった

「…行つたか」

モニターに映る

遙か上空に飛び立つ大天使の姿

「…市民の避難は終わってるな？」

「終わっておる」

ウズミの問いに、首長の一人が答える

「では、私らも行こう。脱出した後、オノゴロを放棄する」

ウズミたちの目の前で、オノゴロ島で大規模な爆発が起こった

続く

宙へⅡ

俺達、オーブ軍艦クサナギ、元地球軍艦アークエンジェル、そしてソレスタル・ビーイング。プトレマイオス2はL4コロニー群の一つのコロニーに向かっていた。

そして、アークエンジェルの格納庫にはシャトルが用意されて、パイロットスーツに着替えたアスランさんとキラさん、俺がシャトル近づいていくと……シャトルの横にはディアツカさんとニコルが待っていた。

「もし、俺が戻ってこなかったら、ジャステイスは君が乗ってくれ」「イヤだね、あんな機体、お前が乗れよ」

アスランさんがディアツカさんに言うのとディアツカさんはそう言うって遠まわしに『帰ってこい』と言っていた。

「君まで来る必要は無いんだぞ？」

ディアツカさんに言った後、アスランさんは俺に向かって言ってきた

「わかってます……ですが、少しでも護衛は多いに越したことはありませんから、僕も行かせてもらいます」

「……わかった」

「待て、お前！」

アスランさんが渋々と言った顔をしながら納得した、そんな時、カガリさんがシャトルの反対側から無重力を飛んでくるように来てアスランさんに飛びつく

無重力でカガリさんがアスランさんに飛びついたことで二人の体が後ろへと進んでいく

「なんで、プラントになんか……」

「…今のプラントがどうなっているのか。そして、父の真意を聞かなくちゃいけないんだ。俺がどうしなればいけないのかわかりたいから……」

「でも、お前、アレを置いて行くなんて……」

カガリさんはそう言いながらアスランさんのジャステイスを見ていた。

「ジャステイスはここに置いて置かなくちゃいけないんだ……大丈夫、キラが全てやってくれる」

「お前……」

「カガリ……」

キラさんが、カガリさんの腕をつかんで離そうとする

「キラ……」

「わかりますよね」

「…」

キラさんとニコルの思いを感じ取ったカガリさんは、しゅしゅアスランさんから離れる

カガリさんはアスランさんから離れてアスランさんが救命ポットに乗ろうとするとカガリさんが叫ぶ

「お前！死んだら許さないからな！」

アスランさんは、呆気にとられた表情になっていた……そして微笑んだ。

「……………わかった」

それから数分後キラさんはフリーダムでアスランさんシャトルで、アークエンジェルから発進した。

「ニコル、お前のアストレイ借りるからな」

「わかっていますよ、《ミラーージュコロイド》を搭載したんですから……」

「この、守備は任せてください。直に『アレ』も完成する予定ですからね」

「ああ、頼む。それと、オーブから出る前に家の地下施設に血だらけで倒れていた少女の看病も頼むよ。」

「もちろんですよ」

俺はニコルと軽くそんな話をする。ニコルのアストレイ・グリーンフレームリバイブにパイロットスーツ着替えてからアークエンジンから発進した。

『キラ、蒼、もうじきヤキンの防衛網に入る』

『わかった、近くで待ってる』

「僕も『ミラーージュコロイド』を展開して近くで待っています。」

『いや、戻ってくれ。ここからは俺の仕事だ』

『プラント』近くに到達していた俺達三人はザフトのアスランさんの言葉でこれ以上先に俺とキラさんは行けないらしい。

近くで待っていいようだとアスランが拒んできた。

『アスラン、君はまだ、死ねない……わかつているよね？』

『キラ……』

『君も、僕も、ソウも、まだ死ねないんだ』

『まだ……』

『うん、まだ……』

「ですな」

『…分かった、覚えておく……』

『忘れないで』

近くで待つていることを拒んでいたアスランさんをキラさんは一言で説得?をしてキラさんとアスランさんは簡単に話してからアスランさんは「プラント」に向けて飛んでいってしまった。

『蒼……』

「わかってますよ、キラさんが言いたいこと……ですが、キラさんは信じてるんでしょう?あなたの親友を……アスランさんを……」

『うん……』

俺とキラさんはそんな話をしてから通信を開きっぱなしでアスランさんが出てくるのを待った。

続く

揃う同盟



俺とキラさんがザフトの要塞ヤキン・ドゥーエ防衛網から少し離れた位置で別々にアスランさんを待っているとザフト内で何かがあったのかピンク色の戦艦が猛スピードでヤキン・ドゥーエ防衛網に入り込んで突破を計ろうとしていた。

「キラさん……あの船にきつとアスランさんが乗っているかもしれないせん」

『うん……わかってる。ソウ……遠距離から援護お願い』

「任せてください！ねらい打ちますよ！」

キラさんと俺はヤキン・ドゥーエ防衛網に入り込んだピンクの戦艦を援護すべく動き出した。

その頃……ヤキン・ドゥーエ防衛網のMSジン数十機に正面を固められたピンクの戦艦【エターナル】の艦橋は緊迫感に包まれていた

「主砲、発射準備、CIWS起動!!」

「この艦にモビルスーツは!？」

命令を下すバルトフェルド隊長に、俺……アスランが訪ねると

……

「生憎出払っていてね。この艦は、フリーダムとジャスティス専用運用艦なんだ」

バルドフェルト隊長がこちらを向いて少し笑いながら言ってきた

俺はあることを思いラクスの方を見た。

ラクスは、キラにフリーダムを渡したときから【エターナル】の奪取を考えていたのかもしれない……………砂漠の虎の異名を持つバルドフェルド隊長を仲間にして……………

「全チャンネルで通信回線を開いてください」

「了解！」

ラクスが指示を出すと兵士の一人が返事をして全チャンネルで通信回線を開く……………ラクスはMSジンのパイロット達に問いかけはじめた……………プラント議長で俺の父……………パトリック・ザラと対立する道を行くこと……………本当は何をしなくてはならないかを考えること……………今、目の前にいるラクスは俺の知っているラクス・クラインではなく、古びた劇場で話をしたラクス・クラインだった……………

「コクピットは外してください」

「難しい注文で」

頭の中で考えているとラクスとバルドフェルト隊長の会話が聞こえてきて正面をむき直すとジン部隊が攻撃を始めだす……………質より量で勝っているヤキンの防衛網のジン

に徐々に追いつめられていく……………俺はなにもできない……………せめてMSさえあれば……………俺には……………そうだ！

「通信チャンネルを……………コード【リバイヴ】で開いてくれ！早く！」

「え、えっと……………」

俺が怒鳴るように言うのと通信を受け持っていると思われるザフト兵が動揺していた

「……………繋いでください」

「……………りよ、了解！」

動揺しているクルーにラクスが一言言うとクルーは普段通りに戻り通信を繋げてくれた

「ごちら、エターナル。アスラン・ザラ！現在、この艦はザフト軍MSと交戦中……………頼む……………聞こえていたら助けてくれ……………」

キラ！ソウ！」

『うん（待ってましたよ）！！』

俺の言葉に…願いが届いたのか上空から蒼き翼を広げた…フリーダムが…キラが駆けつけてくれた

L4コロニー群 メンデル

L4コロニー群その中に未だ稼働しているコロニー…メンデルにプラント付近から戻った俺、キラさん、アスランさん…そして、ピンク色の戦艦…エターナルと先に向かっていたアークエンジェル、クサナギ、プトレマイオス2は停泊していた

「初めまして、と言うのも変かな。アンドリユー・バルトフェルドだ。」
「マリユー・ラミアスです。それにしても、驚きました」
「それは、お互いさまさ」

アークエンジェル艦長のマリユー・ラミアスと手をエターナル艦長バルトフェルドさんが握手を交わす。

バルトフェルドさんは立ち尽くしているキラさんと近くにいた、俺とユウキを見てきた

複雑な表情を見せるキラさんは、バルトフェルドさんに見られると目をそらしてしていた

「よう少年。助かったよ」

二人の間に何かあったのかと思いつながら見ているとバルトフェルドさんはキラさんに普通に挨拶してきた……キラさんは少し躊躇いながらバルトフェルドさんを見る……

「あなたには、僕を撃つ理由がある」

キラさんは弱々しくバルトフェルドさんに言うとバルトフェルドさんは少し笑みを零す

「戦争をしているんだ。そんな物、誰にだってあるし。誰にだってない」

「……………ありがとう」

続く

動き出す戦場

◇L4コロニー群 コロニーメンデル プトレマイオス2・第2医務室

「キャロ、彼女の容態はどうかかな？」

プラント近郊から戻ってきた俺は東の間の平穏に第2医務室に足を運んでいた

『ソウさん！いらしたのですね？彼女の傷は完治、無くなった右腕も再生に成功しました！後は彼女が目覚めるのを待つだけですよ！』

「そうか……ありがとうな」

『いえーソウさんには返しきれない恩がありますから当然ですよ』

俺が医務室で声をかけたのはピンクロングヘアの少女「キャロ・ル・ルシエ」

彼女は一時期、俺が地球連合軍に潜り込んでいたときに基地内部で発見し保護した少女……発見時には声が完全に潰れて目は『死にたがっていた』のを見過ごせなく、基地を内部爆破し彼女を保護したのだ

声は俺が作った機械でなんとか出せるようになり、日々を暮らす内に俺らに打ち解けてくれて、今はプトレマイオス2の医務室をしてくれている。他にも連合軍から保護した子供たちがこのプトレマイオス2で補助役を担っている……そして……俺とキャロが話していた少女……黒髪の少女はオーブの地下施設に血だらけなところを発見、直ぐに治療用カプセルで保護してキャロに治療を任せていた

「キャロ、後は任せるよ。招かれざる客が来たみたいだからね」

『はいー任せてくださいー！』

プトレマイオス2内にサイレンが鳴り響いて俺はキャロに一言言い、艦橋に向かって走り出した……この時、少女が微かに目を開けていたことを俺とキャロは知らなかった

◆
「ユウキ、現状は？」

「あつ！ソウ！今さっき、地球軍アークエンジェル級戦艦の接近を確認したところだよ！」

俺がブリッツに付くとユウキ、トール、ニコルがプトレマイオス2の発進準備を進めていた

「了解だ。プトレマイオス2発進！乗組員は所定の位置で待機！ユウキ、トール。艦は任せたよ。ニコル行くぞ！」

「了解」

「うん、わかった」

「わかりました」

俺は指示を出してからニコルと共に格納庫に向かう

「ニコル、久し振りの機体だが大丈夫か？」

俺はパイロットスーツに着替えてからアフレクトを起動、発進準備を進めながらオーブのモルゲンレーテからニコルが受理した、ニコルの元愛機ブリッツの改修機《ブリッツ改》のコクピットに乗るニコルに通信を繋げた

『ええ、大丈夫です。』

「了解。でも、無理はするなよ」

『わかっています』

ニコルは微笑んでから通信を切りブリッツ改でプトレマイオス2から発進していった

次に俺の乗るアフレクトがハッチに移動される

『アフレクト固定、出撃をソウに譲渡するよ。……………ソウ、無理だけはしないだね』

ブリッジのユウキとの通信が開いて通信越にユウキが心配してくれてきた

「わかってる。更識蒼、アフレクト！行きます!!」

俺が操る漆黒のアフレクトは勢いよく宙へと打ち出された

続く

L4戦線



「敵は…オーブ戦での三機に新型か？」

出撃して直ぐに俺は敵M^{モビルスーツ}Sを補足、オーブ戦にて確認した三機と
ヴィルキスに似た黒い六枚羽のM^{モビルスーツ}Sが接近していた

「キラさんとアスランさん、ニコルであの三機をお願いします。俺は
新型をやります！」

『わかった』

『了解した』

『わかりました』

俺は三人に通信をしてからヴィルキス似のM^{モビルスーツ}Sに接近しようとする
とそれに気が付いたのか、それとも元々、俺狙いなのかはわからな
いがヴィルキス似のM^{モビルスーツ}Sが急接近してビームソードを振るってきた

「…アフレクト、目標を駆逐する！」

俺はライフルソードをソードモードに切り替えてビームソードに
ぶつけると火花が舞う

「ツツツツツツ!!」

鏢迫り合いになるが黒いヴィルキスにアフレクトが押されてしま
う

「クウー！」

俺はもう一つのライフルソードを下から振り抜くと黒いヴィルキ
スは後方に一度下がってから直ぐに切りかかってくる

「そう簡単にそっちのペースに持って行かせるかっての！」

俺は速度をあげながら小刻みにフェイントも加えながらライフル

目覚め



黒いヴィルキスと俺の抑止力として作られたパイロットと戦った俺はプトレマイオスⅡに帰還して格納庫にアフレクトを収納する

「ソウー！」

「ユウキ……」

コクピットからだと直ぐに心配顔をしたユウキが抱きついてきた

「……ソウ、大丈夫だよね？どこも怪我無いよね？」

ユウキは黒いヴィルキスに押されていた時のことを心配してくれていた……

「うん、大丈夫だよ。」

「……ならいいんだけど……無茶しないでね？次からはボクも出るからさ」

「……わかった」

ユウキは一度決めたことは曲げない……俺を心配してくれているのは嬉しいが……こっちも心配でもある……

「ソウさん、ユウキさん。マリューさんから緊急とのことで通信が入ってます」

「!!」

俺とユウキはニコルの声で我に返ってお互いに今、行る場所を思い出して真っ赤になりながら離れた

「あ、ありがとう、ニコル。」

俺は真っ赤になりながらも伝えにきたニコルに礼をいい、格納庫出入り口横の端末まで移動して他の艦に通信を入れた

「フラガさんとディアツカさんが戻ってこない?」

各艦に連絡を入れるとムウ・ラ・フラガさんとディアツカ・エルスマンさんの二人がコロニー内に入ったきり戻ってこないとのことだった

『ええ、ムウによれば《ザフト》が居ると』

『しかし、なぜフラガにはザフトの居場所が判ったんだ?』

エターナルのバルトフェルドさんの疑問も最もだ……なぜ、フラガさんがザフトがいるとわかったのか……

『ラウ・ル・クルーゼだわ。ムウとクルーゼはお互い近づくとお互いの位置がわかると言っていました』

ムウ・ラ・フラガさんとそのラウ・ル・クルーゼはどんな関係なのだろうか?

いや……そんなことよりもだ

「前には地球軍、後方にはザフト……もう、このあたりは使えません。戻ってこないフラガさんとディアツカさんの二人を連れ戻して離脱する事を提案します」

『その通りね』

『ああ、そうしたほうがいいな。だか、フラガ達を連れ戻すにも誰かが直接行かないと行けないぞ?』

その通りだ……Nジャマーで通信が安定しないため、通信は出来ない……誰かが迎えに行くしかない……

『僕が行きます』

不意に入り込んできたキラさんの声……

「わかりました、こちらからはニコルを送ります。他戦力は地球軍を迎え撃つべきですね」

『ええ』

『そうだな』

全艦の艦長の意見が纏まり俺は通信を切った

「勝手に決めて悪かったな、ニコル」

「いえ、気にしないでください。僕もクルーゼ元隊長がいるなら行くべきだと思ってましたから……ブリッツで出撃します」

「ああ、無茶はするなよ」

「はい、わかってます」

ニコルはそう言うとブリッツ改で出撃していった

「それじゃあ、機体の整備でも……」

『ソウさん、今、お時間よろしいでしょうか？』

次の戦闘に備えてアフレクトの整備を行おうとすると医務室のキャロから通信がきた

「どうかしたの、キャロ？」

『助けた少女が目を覚ましました』

「それはよかった。俺がそっちに行くまでに少女に服を着せておいてくれ」

『了解しました！』

キャロと短い会話をして通信が切れると俺は第2医務室に向かった

◇

「キャロ、入るぞ」

『はい！どうぞです！』

俺は入る前にキャロに断りを入れてから入ると今まで目を覚ましていなかった茶髪の少女が薄い水色の病院服みたいな服を着て寝ていたベッドの上に座っていた

「お兄さん誰？」

「こうして会うのは初めてかな。僕はソウ。ソウ・S・クロスロード。この艦の艦長をしている者です。お名前いえる？」

「…………マユ・アスカ」

少女は怖がっているのか小声で名前を言ってきたが…………ちゃんと聞こえた

「マユちゃんだね。ねえ、マユちゃん？起きてばかりで申し訳ないけど自分がどうなって、どうしてここにいるかわかるかな？」

俺が聞くがマユちゃんは首を横に振った

「そうなんだね…………マユちゃん」

「…はい」

「自分がここにいる理由を知りたい？マユちゃんは聞かないと行けないとは思うけど、それは、僕が決めることじゃない。マユちゃんが決めることだよ」

「……………お願いします」

マユちゃんは少し悩んでから首を縦に振ってきた

「……………わかった」

「それじゃあ……………お父さんとお母さんは……………」

「多分……………ごめんね。僕達も直ぐに地球から宇宙に上がったからマユちゃんの家族の安否はわからない……………だけど……………」

「マユちゃんの怪我の様子を考えると……………ご両親はもう……………」

「……………お母さん、お父さん……………うああああああああああ……………」

俺はマユちゃんに俺が知っていることを全て話した

マユちゃんは家族が死んだことを突きつけられて話し終わると泣き出してしまった

俺は泣いているマユちゃんを抱き締めるしかできなかった

「すう〜すう〜」

「寝ちやったか……」

数分間泣き続けたマユちゃんはそのまま寝てしまった

俺はそつとベッドに寝かせてキャロと見守っていた

「キャロ、そろそろ俺は行くよ。地球軍がいつ、攻撃を再開するか、わからないしザフトも来ているからな」

「…わかりました、マユちゃんのごことは見てますので安心してください」

「ああ、頼むよ」

キャロにそう言って俺は医務室をでた

『センサーに反応！地球軍戦艦が動きだしました！』

「来たか……」

医務室から格納庫に移動していると艦内放送が鳴り響いた

『対モビルスーツ戦闘用意！パイロットは各モビルスーツで待機！繰り返す……』

「しつかり仕事をこなしているな……おっと、こんなことしている場合じゃないか」

俺はそうつぶやくと格納庫に急いだ

続く